

大斎節第2主日 マルコ8章31―38節

〔新共同訳〕

27 イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。28 弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」29 そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」30 するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

31 それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。32 しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

34 それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。35 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。36 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。37 自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。38 神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる。」

①文脈

ペトロの告白（27―30節）

27 そして 出て行った イエスと彼の弟子たちは

フィリポ・カイサリアの村々の中へ。

そして 道において

彼は尋ねた 彼の弟子たちに

言いながら 彼らに、

「誰で 私があると 人々は言っているか」

④ 27節に「道において」とある。この「道」はイエスが誰であり、弟子は誰であるかを教えた道であり、十字架へとつながる「道」でもある。だから、「道において」が文頭に置かれて強調されている。この段落では、イエスが「道において」弟子に向けた質問がテーマとなる。

⑥ 28節では、弟子たちは人々がイエスに抱いている像を告げるが、それは6章14―15節でのイエス像と変わりはない。

14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」<sup>15</sup> そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。

イエスを「洗礼者ヨハネ」とか「エリヤ」とか「預言者の一人」と見なす群衆の興味は、イエスが行う奇跡にあり、その先に進もうとはしない。彼らの目に映るイエスは、メシアに先立って登場する終末的な人物にすぎない。

◎イエスはまず、人々がイエスを誰であると言っているかを尋ね、弟子がそれに答えると、同じ質問を弟子に向ける。

29 　そして　彼は　尋ねた　彼らに、

「だがあなたがたは　誰で　私があるとどうするか」

答えて　ペトロは　言う　彼に、

「あなたは　ある　キリストで」。

30 　そして　彼は叱った　彼らを

ようにと　誰にも彼らが言わない　彼について。

この質問では「あなたがた」が強調されているから、人々よりも弟子の考えにイエスは注目している。イエスが尋ねると、弟子を代表してペトロが「あなたはキリスト（＝メシア）である」と告白する。弟子たちは群衆とは違って、イエスはメシアだと知っている。だが、彼らのメシア観はまだ当時のユダヤ人のそれを越えてはいない。

①そこでイエスは自分のことを口外しないようにと命じる。イエスは確かにメシアであるが、人々が期待していたような地上的勝利者ではなく、十字架に上るメシアである。ペトロもまだそれを理解してはいない。イエスは人々の誤解を避けるために、口外しないようにと命じる。

## ②受難予告とペトロ（31―33節）

ペトロはイエスこそキリスト（メシア）だと告白するが、この告白にはまだ欠けたところがある。イエスはその欠けたところを埋めるために、受難を予告し、負うべき十字架を自ら示す。この段落では31節が受難を予告し、32―33節はペトロとイエスが「叱り」合ったことを述べている。

31 　そして　彼は始めた　教えることを　彼らに　次のことを

必要である　人の子が　多くのことを　苦しむことが

そして　拒絶されることが　長老と祭司長と律法学者によって

そして　殺されることが

そして　三日の後に　よみがえることが。

32 　そして　率直に　言葉を　彼は話していた。

そして　わきへ連れて行って　ペトロは　彼を

始めた　彼を叱ることを。

33 だが彼は 振り返って そして 見て 彼の弟子たちを

叱った。ペトロを、そして、言う、

「立ち去れ、私の後ろに、サタンよ、

なぜなら、あなたは考えない、神のことを

そうではなく、人間のことを」。

③ 31節で「必要である」と訳した語は、ある行為の必然性を表すが、多くは神の計画や指示に基づく必然性を表す。

④ イエスは弟子の理解の不十分さを教えるために、人の子は苦しみ、拒絶され、殺された後に、よみがえることを隠すことなく「率直に」語りかける（32節）。だが、イエスが歩むメシア像をまだ理解できないでいるペトロは彼をわきへ連れて行き、「叱り」始める。

⑤ 「叱る」と訳された語エピテイーマオーは、ある行動を阻止したり、終わらせるために「叱る・戒める」、「強く非難する」、「語気を強めて注意する・真剣に説く」を意味する。ペトロはイエスを叱るが、そのペトロをイエスも「叱る」（33節）。同じエピテイーマオーが用いられたのは、両者のメシア観が相容れないものであることを示すためだろう。

⑥ ペトロとイエスが互いに叱るのは、両者のメシア観がまったく異なっているからである。メシアを地上の勝利者と思いついでいるペトロは、イエスの前に立ちただかつて、十字架への道を阻止しようとする。しかし、そのようなペトロは神のことではなく、人間のことを考える「サタン」である。むしろ、ペトロはイエスの「後ろに」さがり、十字架の道を彼に従うべきである。それでイエスは「私の後ろに」立ち去れと命じる。

⑦ 31節の受難予告は、もともとは29節のペトロの告白とは切り離された伝承であったものを、マルコが組み合わせた可能性がある。なぜならほぼ同じ受難予告がさらに二度繰り返され、ペトロは「メシア」と告白したのに、イエスは「人の子」の運命について語っているからである。もしこれが正しいとすれば、マルコはペトロの告白と受難予告をつなぎ合わせることで、イエスはメシアであるが、十字架に上るメシアであることを強調していることになる。

### ③ 弟子たちの従うべき道（34—38節）

34 そして 呼び寄せて 群衆を 彼の弟子たちと共に

彼は言った、彼らに、

「もし、誰かが、欲するならば、私の後ろに、従うことを、

彼は否定しなさい、彼自身を

そして、彼は運びなさい、彼の十字架を

そして、彼は従いなさい、私に」。

35 なぜなら誰であれ、欲するならば、彼の命を、救うことを

彼は失うだろう、それを。

だが誰であれ、失うならば、彼の命を、私と福音のために

彼は救うだろう、それを。

① イエスは群衆を弟子と共に呼び寄せ、イエスに従うことが何を意味するかを教える。34節三行目の「私の後ろに」は、33節でペトロに「私の後ろに」立ち去れ、と命じた際の表現と同じである。弟子とは「イエスの後ろに」あつて生きる者である。

② 「従う」という動詞が34節三行目と六行目に繰り返される。その間には、イエスに従う弟子が取るべき態度が示されている。イエスの後ろに立って、後に従いたければ、自分を「否定して」、十字架を「運ぶ」者とならねばならない。「否定する」と訳した動詞アパルネオマイは、ペトロがイエスを否んで「知らないと言う」(マコ一四30・31・72)の意味にもなる。弟子はイエスを否定せずに、むしろ自分を否定し、自分の望みを捨てて、十字架を背負う。弟子は自分が持っているメシアへの期待を否定し、イエスが示すメシア像を受け入れる。なぜなら、「私と福音のために」命を失うことが救いへの道だからである。

③ 従う(アコルーセオー)

新約聖書には90回の用例があり、そのほとんどは福音書の用例である(マタ25回、ヨハ19回、マコ18回、ルカ17回)。

④ 文字通りに、「後について行く・後ろから行く」。

エルサレムに入るイエスを喜ぶ群衆は、前を行く者も「後に従う者」もホサナと叫んで歓迎した(マタ二一9、マコ一9)。よみがえったイエスに従うようにと言われたペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子が「ついて来る」のが見えた(ヨハ二20)。群衆はパウロを殺せと叫びながら、「ついて来た」(使二36)。

ついて行く人物が明示される用例もある。死んだ娘を生き返らせて欲しいと願う指導者にイエスは「ついて行く」(マタ九19)、過越の準備のために都に行き、水がめを運ぶ男に「ついて行く」ように弟子に指示を与えた(マコ一四13、ルカ二二10)、ペトロは逮捕されたイエスに遠く離れて「従い」、成り行きを見ようとした(マタ二六58と並行箇所、ヨハ一八15)、羊は声を知っている羊飼いに「ついて行く」(ヨハ一〇4・5)、兄弟ラザロを亡くしたマリヤが急に立ち上がるのを見たユダヤ人は、墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女の「後を追った」(一31)。

⑤ ついて行く者の意図をある程度は理解して「追いかける・同行する・同じ所へ行く」。

群衆は、福音を宣べ伝え奇跡を行うイエスに「従い」(マタ四25)、山上の説教を終えたイエスに「従い」(八1)、人里離れた所やベトサイダの町に退いたイエスの「後を追い」(二四13、ルカ九11)、瀕死の病人を救うためその家に向かうイエスに「従い」(マコ五24、ルカ七9)、病人にするしを行ったイエスの「後を追う」(ヨハ六2)。黙示録6章8節では、陰府(ハデーース)は青白い馬に乗った「死」の「後を追う」。主に結ばれて死んだ人々の行いが彼らの「後を追う」という表現は、現世での行いが来世での安らぎを約束するという意味(黙一四13)。

⑥ 弟子として「従う」。新約聖書では、もっぱらイエスの弟子として従うことを表す。

この用法がよく分かるのは弟子の召命物語である(マコ一18と並行箇所、ヨハ一40・43など)。「わたしに従いなさい」という呼びかけは「わたしの弟子にないなさい」の意味である(マコ二14と並行箇所、一〇21と並行箇所、マタ八22、ルカ九59、ヨハ一二26)。マルコ8章34節でも、この表現を使ってイエスは人々を招いている。

⑦ 否定する(アパルネオマイ)

動詞アルネオマイ(相手の言うことを否定する)から派生した動詞で、元来はアルネオマイの強

調形。新約聖書での用例は共観福音書に限られる（マタ4回、マコ4回、ルカ3回）。「誰かを否定する・拒絶する」の意味で、その人との関わりを拒み、縁を切ることを表す。

⑦ 11回の全用例のうち8回が受難物語での用例であり、イエスを否認する。ペトロに使われる。弟子たちと最後の食事を終えたイエスは、ペトロは鶏が二度鳴く前にイエスを「知らないと言おう」と予告する（マコ一四30、マタ二六34、ルカ二二34）。これを聞いたペトロは、たとえ一緒に死なねばならなくなっても、イエスを「知らないと言おう」ことは決してないと答える（マコ一四31、マタ二六35）。しかし、大祭司の屋敷の中庭に入ったペトロはイエスとの関係を問う詰められると、イエスを知らないと言ってしまう。すると、鶏が再び鳴き、ペトロは「わたしを知らないと言おうだろう」というイエスの言葉を思い出し、泣いた（マコ一四72、マタ二六75、ルカ二二61）。

ペトロ以外の弟子は逮捕されたイエスを見捨てて逃げてしまうが（マコ一四50）、イエスとの関わりを拒絶したという点では、ペトロと変わりはない。だから、イエスを「知らないと言おう」ペトロはイエスを拒絶した弟子を代表するものである。

⑧ ルカ12章9節では、動詞ホモロゲオー（認める・公に言い表す）の反意語として使われる。人々の前でイエスを認める者はイエスから認められるが、イエスを否定する者は、神の天使たちの前で「知らないと言われる」。

マルコ8章34節とマタイ16章24節では、イエスに従う者にふさわしい態度を教えて、自分自身を「捨て」自分の十字架を背負って、従いなさいと呼びかける。これは「徹底的に自分自身を放棄して行動する」の意味であり、真に従うべき相手を見つけた者のあり方を表す。

イエスに従う者は、救いが自分からではなく、「わたし（イエス）と福音」から来ることを知っている（マコ八35）。だからこそ、自分をイエスに明け渡すために、自分を放棄することができる。「自分自身を否定しなさい（＝捨てなさい）」という呼びかけは、救いへの招きである。

◎ イエスとイエスの言葉を恥じない（36—38節）

36 なぜなら何の 益になるのか 人に

得ることは 世界全体を そして 失うこと 彼の命を。

37 なぜなら何を 与えるだろう 人は 代価として 彼の命の。

38 なぜなら誰でも 恥じるなら 私を そして 私の言葉を

この時代の中で 神に背いた そして 罪深い、

人の子も 恥じるだろう 彼を、

彼が来るときに 栄光の中で 彼の父の 聖なる使いたちと共に

⑦ 彼の命を失うなら

36・37節の「なぜなら」は35節の言葉の根拠を示しており、「イエスと福音のために」救われた命と世界全体とが対比される。イエスは「人が自分を犠牲にするなら、世界全体を得ることは何の益になるのか。何の益にもならない」と述べ、救いの命を失うなら、取り返すことはできないことを教える。

⑧ イエスとその言葉を恥じる

世界全体を手に入れる者は、「神に背いた、罪深いこの時代の中で」、その価値観に従って生き

る者である。彼らはイエスとその言葉を恥じる。そのような生き方をする者を、イエスも恥じる。イエスが再び来るときには、「父の栄光に包まれ、聖なる使いが伴っている」。イエスを恥じる者が生きる世界は「神に背いた、罪深い」という言葉で表され、それに対応して、イエスがもたらす救いの世界が全く異なるものであることが「父の栄光、聖なる使い」という言葉で表される。

① 恥じる（エ。パイスキユノマイ）

新約聖書では11回用いられ、「恥じる、恥ずかしいと思う」を意味する。

⑦ イエスは受難と復活を予告した後で、わたしとわたしの言葉を「恥じる」者は、人の子も終わりの時にその者を「恥じる」と警告する（マコ8:38と並行箇所）。イエスを「恥じる」者とは、イエスから離れ去る者のことである。

④ パウロが、福音を「恥としない」（ローマ16）と力強く宣言するのは、福音は信じる者すべてに救いをもたらす神の力である、と知っているからである。それゆえ、パウロが「恥ずかしいと思う」と考えるのは、罪に仕えて死に至ることであり（ロマ6:21）、福音の力を知るなら、パウロが囚人の身であることを「恥と思う」ことはない（2テモ1:16）。

⑤ ヘブライ人への手紙2章11節では、イエスは人間を兄弟と呼ぶことを「恥としない」と述べている。神もまた、救いを熱望して旅を続ける信仰者たちの神と呼ばれることを「恥としない」（ヘブ1:16）。彼らを都に迎え入れることが神の願いだからである。イエスはその神の願いを実現する唯一の子であるから、罪を償えない弱い人間の兄弟となることを拒まない。

④ 人の思いを否定し、十字架の道を歩む

① イエスは弟子たちと共に群衆を呼び寄せる（34節）。イエスは弟子だけでなく群衆にも語りかけ、自分に従う生き方へと招いている。群衆は五千人を養う奇跡を見ても、イエスに対する見方を変えることのなかった人々である。群衆は奇跡を通してイエスが誰であるかを見ることができず、「洗礼者ヨハネ、エリヤ、預言者の一人」と言っている。それに対して、ペトロと弟子たちは、イエスを「メシア」と告白するが、イエスが十字架に死ぬメシアであることの意味を分からずにいる。弟子たちはイエスに従う者は、イエスと共に十字架への道を歩む者であることを受け止めていない。だからこそ、イエスはここで、弟子と群衆に自分に従う者の取るべき態度を教える。

② イエスをメシアであると告白する者は、イエスが歩んだように、十字架への道を歩まねばならない。この決意を欠いた告白は、言葉そのものは正しくても、無意味な告白に終わる。3章12節で「あなたは神の子だ」と告白した悪霊がペトロと同じように「叱られた」のは、従う決意を欠いた告白だからである。イエスは確かにメシアであるが、十字架に上るメシアなのである。

③ 信仰の告白は苦難を耐えさせる力であると同時に、それに応じた行動を求める。イエスはメシアでありながら、多くの苦しみを受け、拒絶され、殺されて、よみがえる。この世の勝利者を求める「人の思い」によってイエスは殺される。ペトロはイエスからその死を告げられたとき、イエスを叱り、イエスはそのペトロを叱る。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」というイエスの言葉が示すように、イエスに従う者は人の思いを否定し、神の思いに従うイエスと共に十字架への道を歩む者である。この世が与えることのできない命をイエスが生きて示したことを告白する者は、苦難を生きることによって救いの命を与えられていることをこの世に示す者である。